

## 「医学徒として原子野で見たもの」

元長崎大学長 土山秀夫



只今ご紹介いただきました土山でございます。私がこの演壇に上るのは、大変久しぶりで、懐かしい感じがいたします。確か、最後に上りましたのは、昭和61年、ちょうど私が医学部長をしておりますときに、その年の卒業生に、ここで卒業証書を授与した覚えがございますが、それ以来だと思えます。考えてみますと約20年近く経っております。先程の川野先生が88にならんとするという大変お元気なお姿を見まして、私はもっと元気なはずでございます。今年でちょうど80でございますので、まだまだ川野先生から見たら青二才ということかと思えます。

私は経歴が変わっておりまして、戦後旧制高校を経て長崎医科大学に入り直しました。したがって、昭和20年のこの被爆時は、附属医学専門部の学生でありまして、3年生でした。ところが、非常に戦局が逼迫しておりまして、卒業が繰上げ短縮ということで、その年の10月には、軍医学校を経て前線に送られることになっておりました。幸いというべきか分かりませんが、8月で戦争が終わりましたので、戦地には行かずに済みました。しかし、半面、この原爆被爆という大変悲惨な状況に遭遇するという、これもひとつの運命だったと思えます。

私は、当時、このすぐ近くの山里町という所に住んでおりました。現在の平野町でございます。今の原爆資料館の隣に平和会館がございますが、平和会館の横に駐車場がございます。あそこに私の家がございます。兄一家4人と同居しておりました。もうその頃は、あの戦争が敗戦濃厚とい

うこともありまして、子供とか年寄りとかあるいは病弱者は、できるだけ田舎に疎開させるようにという命令がありました。私の母が大変病弱だったものですから、佐賀県神埼郡仁比山村という所に遠縁の家があって、そこに疎開させておりました。この仁比山村というのは、今の吉野ケ里遺跡というのがございますね、あの近くにあたります。

私の同居してました長兄は、5日ほど前にその母を見舞って帰って来たばかりでしたが、ちょうど8月7日つまり原爆が落ちる2日前の夜に、私達は「ハハキトク スグオイデヲコウ」という電報を受け取りました。戻ってきた兄は、もうこれ以上休暇が取れないということで、別所帯を持ってました、角尾内科の医者になっていた兄がおりまして、その兄とふたりで出掛けるということになりました。ところが当時は、軍人軍属優先で、汽車の切符がなかなか一般の市民には入りませんでした。当時の看護婦さんのお兄さんが駅員をなさっているということで、伝を頼んで何とか切符をと、お願いいたしました。実はその時は、私達卒業試験の真っ最中でありまして、もうあと1ヵ月すれば卒業試験が全部終わるという時期でもありました。ところがその切符がやっと入りそうだと、それは8月9日の11時頃の切符ということでございました。ところが後で、幸いもっと早い切符が手に入った。同じ8月9日の午前7時頃の切符だということになりました。もし、11時頃の切符であれば、おそらく私はこの世に存在していなかったであろうと思えます。こうして8月9日の朝午前6時57

分だったと記憶しておりますけれども、その列車で出発いたしました。

午後、佐賀に着いてみますと、奇跡的に母の病状が持ち直しております、ラジオで長崎に新型爆弾が投下された、損害は軽微なる模様、軽微というのは極めて不適切な表現だとは思いますが、その頃の大本営や発表はみんなこういうものでございました。で、母は病状が持ち直しておりますので、私の同居している兄一家のことを非常に案じまして、「もう自分はいいから、とにかく帰って知らせてくれ」と、あんまり懇願するものですから、その日の夕方、佐賀の神埼駅を発って、とんぼ返りいたしました。

しかし、列車が途中でずっとストップ。ストップをさせられて、道の尾駅までたどり着いたのは、翌朝の午前5時頃でございました。駅から一歩出ますと、先程川野先生のお話にありましたように、まさにこの世の地獄としか思えないような光景が、展開されておりました。私達はその頃既に、いろんな人間の死ということを目の当たりにしておりまして、少々なことでは動じないはずなんですけれども、さすがにこの光景だけは、終生忘れることができません。先程の表現にありましたように、すれ違っていく人達が、担架に乗せられた人、杖をついた人、あるいは歩いている人でも、夢遊病者のように虚空を全くぼんやりと眺めたまま、黙々と通り過ぎてまいります。ほとんど裸に近いか、衣類は血染め、あるいは熱傷のために皮膚が垂れ下がったり、顔面、腹部、その他、男女の別も定かでないくらい、青黒く腫れ上がった人達の群れでございました。道路はすっかりえぐられて、赤茶けておりました、前日の火災の跡が、残っていて、あちこちで余塵がくすぶっておりました。道路上に散乱している死体はどういうわけか、虚空をつかんで、そのまま生き絶えた方が大変目立ちました。途中で足元の負傷者が、口々に「水をくれ」と言いますが、私共も全く手にしておりませんので、どうしてあげようもありません。

警防団というのが、当時、戦争中組織されてお

りましたけれども、その団員の方から「長崎医科大学の病院は残っているから、そちらに行かれて下さい。負傷者がたくさん担ぎ込まれています」と告げられました。そこで徒歩でずっと歩きながら大橋の鉄橋を渡るときに下を見ますと、川べりにもものすごい人が、積み重なって倒れているのが分かりました。中には、まだヒクヒクと体を動かしている人もありましたけれど、おそらく水を飲みに来て、力尽きてしまった人達だろうと思われました。三菱兵器製作所大橋工場とか茂里町工場あるいは三菱製鋼所、こういう所は皆様もよく写真などでご覧のとおり、ただ鉄骨だけが飴のように曲がって、今にもスクラップ寸前の様相で残っております。

附属病院に近づいて見ますと、外目には確かにコンクリートの建物が全部残っております。迷彩が剥げ落ちて、あるいは火災のため黒焦げになった部分もありましたけれども、よく見ると、渡り廊下が全部吹っ飛んでおりました。それから焼却炉の2本の煙突のうち1本が、上半分が爆風のために曲がって、今にも倒れそうな感じに見えました。1歩中に入ってみますと、床や天井は抜け落ち、あるいは火災のために黒焦げになったりして、惨憺たる光景でございました。

その時、附属病院では、3つの救護班が結成されておりました、生き残られた教授の方の中で、先程お話がございました外科の古屋野教授班と、それから同じく外科の調教授班、それに放射線科の永井助教授班、この3つがございました。私は、別に希望したわけじゃないんですけれども、調教授班に入ってくれということ、そこに入りました。そうしますと、高南病棟という病棟が当時ございまして、今ちょうど修復工事にかかっておりますけれども、その前は第2臨床研究棟、あの近くでございまして、結核専門の病棟でした。そこは焼けているんですけれども、「地下室に多数の負傷者がいる」とのことで、「そこにとにかく行ってくれ」ということでもございました。洞窟のような薄暗い地下室に入ってみますと、子供の泣き声と、それから大人も含めたうめき声で、満ち満

ちておりました。その中に私の旧友も3人おりまして、幸い3人とも軽傷でしたので、再会を喜びあいました。

ただ、その当時はもうすでに、医薬品も包帯も全て底をついておりました、いくら私達医学生であっても、何もしてあげることが出来ません。ただ、死に行く人の脈を取ってあげるとか、「頑張ってください」というふうに励ますか、そのくらいしか出来ない。あの時ほど、医学の無力というものを感じたことはございませんでした。それと異口同音に「とにかく水を」という声に満ちておりました。また、病院の背後にあります小高い丘、あるいは穴弘法という山がございますけれども、そのふもとの畑のあちこちに散乱した死体以外に、ほとんど裸同然の負傷者の方が、あちらに一固まり、こちらに一固まりというふうにおられまして、いずれも「水を」と求められます。水道は全部断水しておりますので、遠くまで行って、バケツの水を汲んでこなければなりません。幸い、今の基礎校舎の中の、ちょうど熱帯医学研究所の一角なのですが、そこに薬学専門部に所属した大きなコンクリートで固めた水槽がありまして、そこには随分水が残っているという話でしたので、私達は、早速、病棟の方からその水汲みを日課といたしました。しかし、今ですと、せいぜい7、8分で着く距離なんですけれども、下が瓦礫の山で、足場がものすごく悪いもんですから、帰る時など水をこぼしては意味がありませんので、2倍も3倍も時間をかけて、汲んで戻るという状況でした。それでも、完全に助からないと分かっている人に、水を含ませてあげますと、苦悶の表情の中に一瞬、感謝とも安らぎとも思えるような表情を浮かべて、やがて生き絶えていくという方々が次々とございました。

また、負傷した方、あるいは全く負傷していないのに、4、5日経ちますと鼻血が止まらないとか、あるいは一番早く出たのは、私のみた限りでは下痢でございました。それも、粘血便とか血便といった下痢。当時が真夏ですので、赤痢ではないかと疑われましたことも、ございましたけれども、

後になって分かったところでは、急性放射線障害ということがございます。こうして、虚脱状態で、あちらの木陰で1人、こちらの岩陰で1人、というふうに、毎日、毎刻、死んでいく人ばかりでございました。

途中で、私は、永井先生とばったりお会いいたしました。先生は頭に包帯を巻いて、そして耳のところはまだ出血が止まらないという状況でしたけど、「おお、土山君、元気だったか」と言われました。なぜ、名前を覚えてくださっていたかと申しますと、戦争中、若いドクターはどんどん召集を受けて戦地に行ってしまいます。したがって、残っているのは、看護婦さんか、もう随分お年のドクターが殆どということで、万が一空襲を受けたときのために、防空当番というのが編成されました。私達学生がそれぞれ班に所属したんですが、私は偶然にも放射線科に配属されました。今日お見えで、ナイチンゲール賞を授与されました久松さんが、当時婦長でいらっしゃいました。まあこういうこともあって、永井先生も覚えていらしたということがございます。

少し私個人の話をさせていただきますと、そういった合間に昼の時間だけ時間をもらって、私の一家がどうなったかということで、その辺りを随分探しました。何せ、以前の町内の面影が全くございませんので、場所の方角すら、なかなか分からない。ただ幸いにして、ある日、焼け爛れたピアノの鋼鉄線が見つかりまして、私の兄嫁は、その頃比較的近所では珍しかったんですけれども、ピアノを持っておりましたので、この辺りじゃないかと思って、その辺りを調べました。すると、顔だけが黒焦げになって、梁の下敷きになって死んでる死体、一見したときに本能的に兄だと感じました。梁を取り除いて見ますと、焼け残った背広の上着の裏に、『土山』というネームがございまして、確認いたしました。すぐそばに、たぶん兄嫁と思われる女性の成人の白骨死体が一体、それから子供が5歳と3歳、2人いたんですけれども、どうしても一体だけしか見つかりませんでした。たぶん1人は遊んでいて、爆風で吹き飛



ばされてしまったんだと思います。まあこうして、兄の遺体を引っ張り出しまして、あらためてその場で茶毘に伏しました。といいますのは、もう火葬場が全く機能しておりませんでした。当初は火葬場は動いていたんですけども、余りにも多くの死者が担ぎ込まれるために、既にお手上げの状態だったわけです。

したがって、肉親の遺体、あるいは他人であっても、道路その他に散乱してる遺体を、それぞれ適当な場所で焼くというのが、普通になっておりました。夕方になりますとあちこちに鬼火のような炎が上がって、そこから薄紫色の煙が上空にたなびいてまいります。真夏の暑い残照の中で、そういったものが一塊になって、うす雲のように市内全体を覆うようになります。それと同時に鼻を襲うのは、なんともいえない臭気、臭いでした。もちろん死体を焼く臭い、焦げくさい臭い、その他散乱している腐敗死体の臭い、そういったものが一斉に襲ってまいります。最近いろんな被爆直後の写真だとか映像を見ますけれども、確かにそれは当時の惨状をくまなく伝えます。しかし、ただ一つ伝えられないのは、この臭いでした。私は今でも時々、市内の少し小高いところに立って、ふっと、あの日の臭いが蘇ってくるのを、どうしても消すことができません。

こうして、その焼け野が原の中で、ちょうど8月15日の敗戦の日を迎えました。私達は10月に軍隊に行くばかりになっていて、死ぬ覚悟ができておりましたのと、完全な軍国主義教育を受けて、マインドコントロールの結果だろうと思いますけれども、神州不滅ということ信じて疑わなかっただけに、そのショックはものすごいものでございました。しかし、そういったことを考える暇もないくらい、後始末が大変でございました。こうして、大体20日ぐらいまで、その場でいろいろな業務に従事いたしましたけれども、そのうちに、新興善小学校の方に特設救護所があって、そちらの手が足りないからということもありまして、時々そちらにも出向いたりいたしました。

調先生の方から、実は今、この長崎医科大学の

再建の問題で非常に揉めている。進駐軍の方針も分かれている。あるいは国内の方も分かれている。その中で一番有力なのが、大村の当時の海軍病院、今の長崎医療センターでございます。「あそこをなんとか、この長崎医科大学として借りて、教育を再開したいんだが」ということで、大変悩んでおられました。確か9月の22日だったと思いますけれども、進駐軍の方から「使ってもいい。ただし事態は流動的であって、ずっと永久というわけにはいかないかもしれない」という話でした。大村海軍病院の方からは、「早くスタッフが来て、診療を開始してくれ。そうでないと取り上げられる」と、こういう情報もありまして、調先生から言い含められて、私を含めた学生4人が先遣隊となって、大村にトラックに乗って参りました。その後、少しずつ増員いたしまして、大体28日頃には学生、ドクター含めて20人ぐらい、それで約8つの病棟をそれぞれ受け持つということになりました。

私は、第15病舎というところで、被爆者の方35人ぐらい収容されているところを、ドクターである中村先生、第一内科におられた方なんですが、その方とペアになって加勢することになりました。私達学生がする仕事といえば、採血して、それを塗抹標本にするという仕事でございました。それまで私達が習っていたのは、全て耳たぶに針で傷をつけて、メランジュールで吸うという手技でした。ちょうど海軍病院の方にはアメリカの調査団と日本の調査団が合同でやって来ておりました。私達はそのアメリカの調査団の配下に配属されて、彼らは、指先をポツと突いて、そこからメランジュールで吸うと、この方法でやれということでした。初めてその方法を知りましたけれども。

そういった加勢をしているうちに、日本側の調査団長、都築教授といわれる、東大から来ておられた教授なんですが、この方が「どうしても急いで、今生き残った被爆者の方たちの実態調査をして欲しい」と。それも「なるべく5,000名ぐらいの規模でやってくれ」ということがございまして、

ドクターと学生と含めて約50人で、それも16日間の間に、大急ぎで実態調査をするということになりました。それぞれ疎開先に行っておられる被爆者の、生き残りの方に、聞き取り調査を綿密にいたしました。結局終えたときは、5,500名の調査が揃いましたが、今こちらの医学部で出版されます出版物の中に、それが収められております。ただ、そうした聞き取り調査をする中で、生き残ったとはいえ、生々しい当時の惨状をご存知の方の聞き取りというのは、こちらも非常に辛くて、胸の詰まる思いでございました。ですから、私はこういった事柄を通して、一体験者としては、痛恨極まりない感情と同時に、医学徒として冷静な観察眼と、両方が混じり合う形で、今日の私どこかに刷り込まれているという感じがいたします。

先程お話がありましたように、大体897名とう説が高いようですけども、それだけの教職員の方、看護婦さんの方、その他技術員の方が犠牲となられ、学長ほか16名の教授の方、10名の助教授の方などが含まれていました。学生に至っては、特に木造の基礎校舎の場合はほんとに全滅でございまして、火災から這い出た人も、結局は死んでしまったという状況でございました。こういうことを考えますと、この死を無駄には絶対にできないという気持ちが、ずっと私の脳裏から去ることはありませんでした。医学部長とか学長時代はとても時間が取れませんが、特に研究生生活の時には、夜半過ぎに帰るといことはしばしばでございましたので、学長を辞めたら、何か少しでもこうした霊に報いることがあればと思っておりました。

結局、行き着いたところは、論文を書いて、なるべく全国の人にこの被爆の実相を知ってもらおう。それもやはり、中央の名の通った雑誌に載せてもらおうということで、岩波書店から出ている『世界』だとか、以前の『中央公論』だとか、あるいは最近の『論座』、さらに日本学会議の雑誌とか、その他に論文として、被爆地から見た今の国際情勢だとか、そういったものをずっと書き続けました。幸い、私は国連軍縮会議だとか平和

都市市長会議、その他、いろんなシンポジウムに引っ張り出されておりましたので、肌身を通じて、海外の外交官だとか研究者の考えというのが、ある程度分かったつもりでしたし、自分なりに、その後、国際政治とか安全保障問題を勉強しなしまして、どうにかそういった論文を書くことが出来ておりました。

ただ、実際的な行動に移ったのは、1998年からでございます。私は従来の反核平和運動というのが、しばしば政党だとか労働組合だとか、宗教団体とか科学者団体というふうな、団体主導型であったことに、何か違和感を感じておりました。しかも、しばしばイデオロギーの論争の場にもなっておりました。そこで他の人と相談して、全く思想信条党派の違いを超えて、一市民として参加できる草の根の集会を開こうと。幸いこれには、長崎市も長崎県も非常に理解を示してくれまして、全国ではこれは初めてのケースだったんですが、2000年に国内外の著名なNGOのリーダーに来てもらって、ここで『核兵器廃絶地球市民集会ナガサキ』というのを開きました。2003年にも第2回を開いて、来年の10月には第3回を開く予定にしております。私は柄ではありませんけれども、実行委員長ということで、全てそのアレンジを任されております。これについては、非常に長崎市民の方々のご理解が得られまして、第1回的时候は延べでありますけれども、5,600の方が参加してくださいました。第2回的时候は6,700人と、来年はもう少し参加していただければ、尚有り難いと思っておりますけれども。こうしたことを通して、少しでも核兵器廃絶へ、被爆地の声を届けたい、それにはやはり原点である被爆の実相というものを、もっともっと知らせたいという気持ちがございます。

アメリカに行ってみますと、依然としてアメリカでは原爆投下は正当な行為だった。あるいはまた原爆投下のおかげで、50万、100万の生命が救われたということが定説になっております。若い人たちもそれを信じている。それに対して、正面からぶつけるような反対論を打っても、これは受

け入れられませんので、幸い、今回、被爆60年を記念して「アンゼラスの鐘」、これは先程お話がございました、聖フランシスコ病院の秋月先生を主人公としたアニメ映画でございますけれども、それを作ろうとういうことで、鉄腕アトムそのほかを製作した虫プロダクションの方が、大変、力を入れてくれました。私に支援する会の会長になってくれということで、募金活動を開始して、おかげさまで皆様方のご理解で、約4千数百万円の寄附金を戴くことができました。ただどうしても国内だけでなく、英語版を作ろう、そしてアメリカの若い人に見てもらおう。海外ではアニメ映画というのは非常に人気がございますし、あの映画は決してイデオロギーを主張したものではありませんので、とにかく被爆の実相を見てくださいうことで、必ず効果が上がると思っております。それも今いろいろ資金カンパをいただきながら、努力しているということでございます。

先程、川野先生が「自分達だけ生き残って、何か相すまない」と罪の呵責みたいなことをおっしゃいました。気持ちは同じでございます。同じですけれども、私は、ですからこそ、何とかそれに報いるためには、今生き残っている私達が、たとえば、つたない話であっても、いつでもどこでも、とにかく自分の口から、そのことをお伝えしようというふうに考えております。そうすることが、先程の犠牲となられた教職員、その他の方々の霊、あるいは長崎市民の犠牲者7万4千人の方々に対する、最大の鎮魂の行為ではなかろうかと、そう信じております。これから本学で学ばれる方々もたくさんいらっしゃいますので、あの体験を共有するということは、これは不可能でございますけれども、せめてそういった記録、あるいは映像、あるいはその証言、そういったものを、是非いろんな場合に目に通していただいて、それを自分なりの解釈で、次の世代に伝えていただければと、そう考えております。大変長い時間、有り難うございました。

---

つちやまひでお  
**土山秀夫氏 プロフィール**

1925年（大正14年）4月23日生まれ 80歳 長崎県出身

1952年（昭和27年） 長崎医科大学卒業

1954年（昭和29年） 長崎大学医学部助手

1959年（昭和34年） 同 講師

1959年（昭和34年）～1961年（昭和36年）  
イリノイ大学客員研究員

1963年（昭和38年） 長崎大学医学部助教授

1969年（昭和44年）～1990年（平成2年） 同 教授

1982年（昭和57年）～1986年（昭和61年） 同 医学部長

1988年（昭和63年）～1992年（平成4年） 長崎大学長  
現 在 長崎大学名誉教授

**【社会活動】**

核兵器廃絶ナガサキ市民会議共同代表  
世界平和アピール七人委員会委員

**【受賞歴】**

2000年（平成12年） 勲二等旭日重光章

**【出版物】**

『カントと生命倫理』『病理学総論』

『さらば、クライスラー』他